

地域づくりの魅力とよるこび



高橋 俊郎さん
下保谷在住／70歳代

保谷第一小学校区のふれあいまちづくり(注)『ふれあい広場』は4年目に入ります。高橋さんは、設立メンバーで現在も意欲的に活躍されています。「終の棲家となる自分たちの地域が安心して、楽しく過ごせるようなところになりたいですね。」

病気が人生観を変える

「警視庁定年時に大腸ガンで緊急入院、10時間の手術でした。悪ければ余命四ヶ月と言われうつ状態の日が続きました。人と話すのも辛かった。だからそういう

人の気持ちも分かる。支え合いが大事だと知る。弱者の気持ちが分かるようになりました。」そして、その後5年間暴力団被害者救済の仕事に巡り会い、「生きる喜びを感じることができ、うつからの立ち直りもできました。」

傾聴ボランティアとの出会い

「救済の仕事も終わろうとしたころ、これから先は何とか社会の役に立ちたいという気持ちが強くなりました」そんなある時、新聞のシニア・ピアカウンセリングと傾聴ボランティアの情報が目に止まりました。早速、文京区で研修を受けて、その後市内の特養ホーム、病院、一人ぐらしの高齢者宅へ伺い、話相手が続けていきます。「最初は難しかったけれど、刺激がもらえて、出合いが楽しい。」

難病の方は、何人もの専門職が関わっている。でも世間話をしてくれる人はいません。刑事という、社会の管理者的立場だった自分にとって、傾聴ボランティアはカルチャーショックでした。相手と同じ立場に立つことの大切さを知り大きく自分自身が変わりました。」全ての活動の精神的基盤でもある傾聴ボランティアは、さらに深めて続けていきたい

町内会などの地域活動において、社会の役に立ちたいと思っている者の割合

